に、平朝臣井尻又九郎忠鋤、謹白小僧喝食若衆言云々、また滑稽詩文一卷あり、男色の詩多し、江島兒が淵に身を投し白菊丸が歌も載たり、男色の事、海人藻介に見え、から國には、龍陽君彌子瑕をはじめ、史記漢書に佞幸おほかり、後に男娼といふ、癸辛雜識にくはし、若衆を垂髮といふは、玉海、吾妻鏡に見ゆ、詩經には總角とあり、催馬樂にアゲマキの歌ありて、ころびあふよしいへるは男色なり、今ニヤケ男などいふは、男娼(ニヤケ)めきたる男のよしなり、

志田草子(十丁ガ)に、君もにやくに御座あり、我等もわかき者なれば云々、又(四十丁ガ)御年もにやくに御座あるが、いづくよりいつかたへ御とほりあるぞと問ければ云々、

〔嬉遊笑覽九 娼妓〕かげまは、京師にては宮川町、大坂は道頓堀、其外にも有べし、人倫訓蒙圖彙に、狂言役者男子を、遊女屋の女をかゝゆるごとくにかゝへ置て、藝を玄いれ、十四五になれば、それ〳〵に色づくり芝居へ出し、藝よく名をとれば、我門口に、大筆にて誰がやどゝ名字を玄るし、夜は戸口に、掛燈臺に名を書付おくなり、いまだ舞臺へ出ぬはかげまといふ、他國をめぐるを飛子といふ、野郎かげまともに看板を出す、雨夜一杯機嫌、元祿六年陰間看板界町媚云々、淺草神明增威勢、目黑目白仰悲憐とあれば、其あたりにもかげま有しなるべし、洛陽集、顏みせや十有五にして樂屋入、千之顏みせやうゐかうぶりして影間共、秋風賢女心化妝、今時男子を野郎屋の新部子に賣云々、歌舞妓事始に、新部子といふは、幼少にて藝の至らざるをいふとあり、へこは薩州の方言なり、其國にへこ侍といふものあり、みな知音を求めて義兄弟となるよしなり、輕き小者ながら義勇を宗とすとなむ、其さまも古風を守りて、寒中も短衣一ッ著、細き帶をすると聞り、今江戸の俗に、へこたれと云ふは、へこたふれの訛りなり、季吟獨吟百韻、やせ馬おひのあやな腕だて、をもき木をおほはら山にへこたふれ、へつほこ侍といふは、このやうの賤きさまをいふにや、風流徒然草に、野郎かげ間いづれも大きなるよし、ぬれは曾我、小栗、あいご、武道は玄だ、哀なるは玄んとく、すみ